

「国語国文学研究」第四十八号 抜刷

平成二十五年二月十二日 発行

阿蘇文書に見える九州方言的な中世記録語をめぐって

堀 畑 正 臣

阿蘇文書に見える九州方言的な中世記録語をめぐつて

堀 畑 正 臣

一、はじめに

先に、「中世阿蘇文書に見える記録語をめぐつて」^①（以下「先の拙考」と称す）と題し、齋木一馬氏が「国語資料としての古記録の研究―近世初期記録語の例解―」^②で示された『上井覚兼日記』^③（天正二（一五七四）年～同十四（一五八六）年の記事）の記録語（三七語）を基に、それらが『大日本古文書家わけ第十三 阿蘇文書』全三巻の中世後期までの古文書の中でのように使用されているかを調査した。その結果、『阿蘇文書』全三巻の中世後期迄の古文書では、齋木一馬氏の取り上げられた三七語のうち、十七語が見え、それらを分類すると次のようになった。

（一）九州以外にも広がりがあるもの（六語）

1 嘸^{あつかひ}、2 案中^{あちゆう}、5 格護^{かくご}、7 口能^{くくのう}、8 現形^{げんぎよう}、14 續^{つづき}

（二）九州方言と辞書等に記載があるもの（二三語）

①九州とその近隣に見えるもの

3 案利^{あんり}（案裏）、10（の）如^{ごと}く

②九州と東北に用例があるもの

13 順逆^{じゆんぎやく}

（三）九州方言の可能性があるもの（三語）

11 愀易^{しゅうえき}、12 愀變^{しゅうへん}、16 閉目^{とじめ}

（四）漢字表記の問題となるもの（四語）

6 稠^{ちゆう}、9 誘^{さう}、15 行^{てい}、17 鮎^{はらふき}（働・動）

（五）未詳（一語）――4 早晚^{いちばん}

迫野虔徳著『文献方言史研究』には、九州方言は「音韻や文法面での特徴」にくらべると語彙の面での特色は著しい。近世初期の京都中央語が九州方言の語彙を特色づけているというようなものではなく、それよりずっと以前に特色ある九州方言語彙は、成立していた、少なくともそういうものが多いと言いうことができるのではないか」（338頁18行）という指摘^④がある。本稿では、九州方言（又は九州を中心とする西日本の方言）という指摘が辞書等にある（二）の記録語と、先の拙考で「九州方言の可能性がある」と推察した（三）の記録語について検

討を行うものである。

二、九州方言と辞書等に記載がある記録語

先の拙考では、齋木一馬氏が『上井寛兼日記』から取り上げた記録語三七語を基に、中世後期迄（文禄年間（一五九二～九六年）頃迄）の『阿蘇文書』の中に見えるそれらの記録語の数を示した。そして、齋木氏が『上井寛兼日記』以外の用例として挙げた『相良家文書』や『大友史料』（続大友史料）も含む』や「九州以外の文書」の用例に加えて、小学館『日本国語大辞典』（第二版（以下『日国大』（第二版）と略）や三省堂『時代別国語大辞典 室町時代編一～五』（以下『時代別室町』と略）の辞書類の用例と「東京大学史料編纂所古記録フルテキストデータベース」（以下『古記録DB』と略）や「東京大学史料編纂所古文書フルテキストデータベース」（以下『古文書DB』と略）に見える用例を調査し分類した。辞書等の中で「九州方言」という記述があったのは、「案利」と「（の）如く」と「順逆」との三語であった。この三語は、更に次の二種類に分かれるようである。

①九州とその近隣に見えるもの—案利（案裏）、（の）如く
②九州と東北に用例があるもの—順逆

先の拙考では、紙数の関係もあり、詳細な検討が出来なかったため、今回は詳細な検討を行う。先に、『阿蘇文書』（『大日

本古文書 家わけ第十三 阿蘇文書之一～三』（以下『阿蘇文書之一～三』と略）の用例と意味を吟味し、その後、辞書類の記述や齋木一馬氏の挙例、東京大学史料編纂所の「古記録DB」と「古文書DB」（共に、二〇一二年九月二八日用例確認）の例を検討する。

二の1 「案利（案裏）」

『阿蘇文書』には次の二例が見えた（「阿蘇」は「阿蘇」に統一した）。

①、（阿蘇家文書下）「伊集院忠棟書状写」

如仰此表當家屬案利候、就夫阿蘇家之事、確執之趣無之候之条、自今已後、不可有御隔心之段、度々申事候、（後略）

天正十一（一五八三）年九月十日（伊集院） 忠棟

②、（阿蘇家文書下）「阿蘇長松丸書状案写」
筑後表之儀、悉被屬案裏之由候、尤肝要候、此等之儀、早々可申候處、無音非疎意候、何様代々無二之辻、向後倍無變化可申談候、（後略）

天正十二（一五八四）年甲申 十月十一日

惟光御事 長松丸

大友殿（義統）（『阿蘇文書之二』732頁5行）

『日葡辞書』には、「あんり（案利、案裏）」の記載はない。

齋木一馬氏は「案利」は「思いのままになる、勝利を得る」の

意とする。『阿蘇文書』の用例もその意味である。例①が天正十一（一五八三）年で薩摩の（伊集院）忠棟から阿蘇（惟將）への返報。例②も天正十二（一五八四）年で阿蘇長松丸から大友義統への書状である。共に九州内の武将間での使用である。『時代別室町』の記載を整理して示す（挙例スタイルは変更した→以下同じ）と、

あんり【案利】自分の思いどおりの有利な状況になること。

1、於此浦辺^茂海賊衆数人討果候。拾云恰云勝利珍重候。
御案利御満足迄候。

（村上文書 元亀元（一五七〇）年七月十二日、
隠岐孫三郎宛 小早川隆景書状）

2、諸口堅加^三下知^二候間、案利不^レ可^レ有^レ程候。可^二心安^一候。
（佐田文書 元亀元（一五七〇）年九月一日、
佐田弾正忠宛 大友宗麟書状）

案利に屬す 戦いで思うように勝利を収めて土地などを領有する。

3、当春中御行於^レ有^レ之者、豊後之事可^レ屬^二御案利^一事、程有間敷由也。

（上井日記 天正十四（一五八六）年二月十六日）

4、筑州表於^レ屬^二案利^一者、統景安堵不^レ可^レ有^レ疑候。
（門注所町野氏家譜 天正十一（一五八三）年十月廿日、
大友義統書状）

【参考】この語は九州方言と見るべきもののようであつて、

特に戦いで思うように勝利を収めることに用いた例が、九州を中心とする西国の文献に見られる。↓案中とある。

『日国大』（第二版）には次のようにある。

あんり【案利】（名）思いのままになること。

（前に一例あるが、『時代別室町』の例2〔佐田文書、大友宗麟書状〕と同じなので略す）

5、御弓箭に及候事は、取分他に非を重ねさせられ、自之理を持せられ候事、御案利無別儀之由候つ、

（上井覚兼日記→天正十（一五八二）年十二月二日）

6、仍庄内諸城無^二残所^一被^レ屬^二案利^一、都城もあやふく罷成候処、

（島津家文書→慶長五（一六〇〇）年四月十一日、
島津義弘書状、大日本古文書二・一一四九）

齋木一馬氏の挙例は、『上井覚兼日記』に「案利」二例で、例3、例5と同じものである。

『相良家文書』に「案裏」一例と、「案利」三例。

7、隈庄^{タマシ} 輒^{タマシ} 屬^二案裏^一候、

（天文八（一五三九）年十二月廿七日、阿蘇惟前起請文）

8、近々至^二小城表^一^{（シロテウカ）}一手遣為^レ可^二取成^一、令^二出張^一候、案利不^レ可^レ有^レ程候、

（天文十四（一五四五）年）十二月廿二日、

有馬晴純書状）

- 9、御分国諸堺、属「御案利」候、
 （永禄十二〔一五六九〕年）五月十一日、吉弘鑑理書狀）
 10、三之山表属「案利」候之处、（後略）
 （天正四〔一五七六〕年）八月三十日、島津義久書狀）
 『大友史料』に「案利」一例があるが、例4と同じである。
 「古記録DB」には、『上井寛兼日記』にだけ三例見える。その内二例は例3、例5と同じである。残り一例を示す。
 11、筑紫表属「御案利」候御祝言、各へ雖可申入候、（後略）
 （上井寛兼日記 天正十四〔一五八六〕年七月十三日）
 「古文書DB」には、『島津家文書』に六例見える。うち一例は、例6の島津義弘書狀と同じなので省略する。
 12、倍諸堺目等御案利之由、尤專要存候、
 （天正五〔一五七七〕年）三月八日、相良義陽書狀）
 13、相良義陽書狀日州早速属「御案利」之由、承及候、尤目出度候、
 （天正五〔一五七七〕年）十二月十六日、相良義陽書狀）
 14、以御出勢肥後國可被属「御案利」事不可有程之由、
 （天正八〔一五八〇〕年）八月十二日、城親賢書狀）
 15、今度於高来表隆信戰死、御案利之至候、
 （天正十二〔一五八四〕年）卯月廿四日、秋月種実書狀）
 16、一 庄内之事、属「御案利」、都鄙之外聞不可過之候、
 （慶長五〔一六〇〇〕年）五月五日、
 島津惟新（義弘）書狀）

『吉川家文書』に二例見える。

- 17、悦爲可申上、一人申付候、倍御案利御吉左右可被仰下候、
 （天正十四〔一五八六〕年）十一月三日、日高吉古書狀）
 18、就懇望深重同方申固候、御案利之次第、尤目出存候、
 （天正十四〔一五八六〕年）十二月四日、草野家清書狀）
 これらの計二十例を年代順に表一に分類した。

表一

屬案裏 二例		案利 八例								語／数
②	7	18	17	15	5	12	2	1	8	番号
1584	1539	1586	1586	1584	1582	1577	1570	1570	1545	年代
阿蘇長松丸書狀案	阿蘇惟前起請文	草野家清書狀	日高吉古書狀	秋月種実書狀	上井寛兼	相良義陽書狀	大友宗麟書狀	小早川隆景書狀	有馬晴純書狀	書8手
阿蘇文書 (大友義統宛)	阿蘇文書	吉川家文書	吉川家文書	島津家文書	日記	島津家文書	佐田文書 (佐田彈正忠宛)	村上文書 (隱岐孫三郎宛)	相良家文書	文書所蔵名〔宛先〕

語／数								
番号								
年代								
書き手								
文書所蔵名〔宛先〕								
9	1609	吉弘鑑理書状	相良家文書	屬案利 十例	4	1603	大友義統書状	門注所町野氏家譜
10	1610	島津義久書状	相良家文書		①	1603	伊集院忠棟書状	阿蘇殿（惟將）
13	1617	相良義陽書状	島津家文書		14	1600	城親賢書状	島津家文書
11	1606	上井覚兼	日記		3	1606	上井覚兼	日記
6	1600	島津惟新（義弘）書状	島津家文書		16	1600	島津惟新（義弘）書状	島津家文書

表一から、書き手は例1の小早川隆景を除く全てが九州の武士である。また、宛先から見て『吉川家文書』にある例17の書き手「日高吉古」は、沓岐国人衆の一人であるらしく、例18の「草野家清」は筑後の豪族であり、例1の隠岐孫三郎以外は九州の武士達である。例7の熟語「屬案裏」が一五三九年で一番早い例である。「屬案利」も例9の一五六九年から例が見え、一六〇〇年まで見えている。「屬案裏」「屬案利」に関しては九州だけで使われているようであるが、「案利」の例では、小早

川隆景書状にも見え、吉川家宛の文書の中でも使用されている。ここから、「案利」の語は「九州地方とその近隣の方言」であり、熟語「屬案利」に関しては、『時代別室町』が述べるように「戦で思うように勝利を収める」の意で、「九州方言」と見なしてよいかと思われる。

二の2「(の)如(ごと)く」の場合

齋木一馬氏は「の方へ、に向って」の意とし、参考に「様にも」「如く」と全く同義に用いられる。もちろん方言である」と述べられ、用例として『上井覚兼日記』四例、『相良家文書』一例、『大友史料』一例を挙げられた。

『阿蘇文書』には「(の)如(ごと)く」は三例見える。

①、(阿蘇家文書下)「阿蘇氏家臣連署状写」

豊田之内田馬片分之事被申候、致披露候、御知行可然候、隈庄御覺悟事候、御移候て、時宜候する時者、豊田給人同前候、如隈庄御越肝要之由、被仰出候、御出役在陣等、不可有御無沙汰候、心事、恐々謹言、

(年欠) 十二月四日 惟貞／惟満

祭主源右衛門殿 (『阿蘇文書之二』679頁2行)

②、(阿蘇家文書下)「惟種書状写」

(前略)、聽而次月如小代可被下候、やもし様被成御意見參、御丁寧蒙仰候て、歸宅候、旁目出候、(後略)

(年欠) 七月廿六日

惟種

矢津田刑部少輔殿 參 御報 (『阿蘇文書之二』 651頁9行)

③、(西巖殿寺文書)「三二四 小陣惟富書狀写」

豊州よりの飛脚も被相留候而、今日こそ返事被調被返候、
俊宗罷越候、如豊州被遣候、更爰元稗候、可有御校量^(候)、

(年欠) 卯月廿二日

惟富

萬福院

小陣三郎右衛門尉

(『阿蘇文書之三』 445頁4行)

『時代別室町』の「いとし」の項目の⑦には、

⑦九州を中心とする西日本の方言で、場所を表わす固有名詞に、直接または助詞の「の」を介して「ごとく(に)」を付けて、動作の方向を示す。「ノヤウニ」「ノゴトク」はある地方で「へ」の代りとして運動の方向を示すのに使われる。例えば「都ノヤウニノボル」「関東ノゴトクダル」など。しかし、これらは粗野で下品な言い方である」

(大文典)

として「貴理師端往来」、「相良家文書」、「八代日記」、「萩藩閥閥録(毛利輝元書状)」の例を挙げる。齋木氏の挙げられた用例と『時代別室町』の用例を年代順に整理して示す。なお、『阿蘇文書』の三例は全て年欠である。

1、又高田之ごとく此城衆をとをし候ずるを、不思議に候て、
薩州さまへ遣候、万期後信候、

(相良家文書 文明八「一四七六」年九月十五日、

島津季久書状)

2、佐敷の中村市兵衛方父子、天草ごとく逐電、

(八代日記 永祿五「一五六二」年三月八日)

3、如「高来」可罷渡候処、類各申被相留候之条、不_レ及_二
是非「先々在寺候、

(貴理師端往来 永祿十一「一五六八」年写本)

4、就_レ其我等事、昨日廿七如「防府」罷下候、元就事も廿六

日被罷立候、

(萩藩閥閥録 永祿十二「一五六九」年四月廿八日、

赤穴久清宛 毛利輝元書状)

5、川辺のごとくかえり候、

(上井覚兼日記 天正二「一五七四」年八月十八日)

6、鹿児島のごとく罷帰候、

(上井覚兼日記 天正二「一五七四」年九月廿三日)

7、重而如「薩陽」可_レ有御成通、示預候、

(相良家文書 天正四「一五七六」年八月三十日、

島津義久書状)

8、諸勢、徳測より如「有馬」出船也、

(上井覚兼日記 天正十「一五八二」年十一月廿日)

9、宮崎のごとく帰宅仕候、

(上井覚兼日記 天正十一「一五八三」年二月廿二日)

10、義統事、如「玖珠」寄陣、何様一稜可_レ加_二下知_一地盤候、

(天正十三「一五八五」年カ) 九月十一日、

大友義統書状)

『阿蘇文書』の三例を含めて計十三例あるが、例4の「赤穴久清宛、毛利輝元書状」以外は九州関係である。毛利輝元書状に例が見えることから、これも九州と九州近隣の方言であると思われる^⑤。

二の3 順逆(じゅんぎやく)

齋木一馬氏は、「とやかく、ともかくも、よかれあしかれ、どっちみち」の意とし、『上井寛兼日記』五例、『相良家文書』一例、『加能古文書』(伊達政宗書状)一例を示された。参考に『パチエス日仏辞典』(ジュンギヤク・九州方言)ともかくもを挙げておられる。

『阿蘇文書』には「順逆(じゅんぎやく)」の例が四例見える。

①、(阿蘇家文書下)「河内政歳外十五名連署起請文写」

一 阿蘇之三殿對申、二心野心之儀を存申し候、去巳□□番、御恩以身上安穩^ニ候之間、順逆上意を背申し候事、

文明十三(一四八一)年辛丑七月五日

河内飛騨守政歳(他十五名署名)

『阿蘇文書之二』257頁5行

②、(阿蘇家文書下)「肥後國諸侍連署起請文写」

再拜々々敬白天罰起請文之事

右、元者御弓矢相定候上者、一味之者共申合、順逆^レ任御指南、涯分可致馳走候、各御覺悟之趣、誠御憑敷候、(後略)

永正二(一五〇五)年九月五日

平山十郎太郎能世(他二十一名署名)

『阿蘇文書之二』259頁2行

③、(阿蘇家文書下)「肥後國諸侍連署起請文写」

再拜々々敬白天罰起請文事

右、元者當國之事、惟長樣可有御格護之由、各申定候、於自今已後、無二心野心之儀、順逆^可奉憑外無餘儀候、(後略)

永正二(一五〇五)年乙丑十二月三日

城上総介頼岑(他八十三名署名)

『阿蘇文書之二』261頁6行

④、(西巖殿寺文書)「六四 肥後隈部衆起請文前書案」

再拜々々敬白天罰起請文事

右、元者、當國之事、惟長樣可有御格護候由、各申定候、於自今已後、無二心野心之儀、順逆^可奉憑外、無余儀候、(後略)

(永正二(一五〇五)年十二月三日)

『阿蘇文書之三』68頁2行

『阿蘇文書』の例①～④は「ともかくも」の意味でよい。

『日葡辞書』には、「Junguacu ジュンギヤク(順逆) まっ直ぐなのとねじれたのと。すなわち、正と不正と。また、下(Ximo)では、どうしても、是非に、という意。」とある。

『時代別室町』には、「じゅんぎやく」順逆^三(副)事態が

どうであれ、そうしなければならない意を表わす、九州方言。

↓善惡^〇「下」^{シモ}では、ともかくも「日葡」として、『上井覚兼日記』と『相良家文書』の例を挙げる。

『日国大』（第二版）には、「〇」（副）とやかく。ともかくもどっちみち。」の意として、『相良家文書』一例、『上井覚兼日記』二例、『日葡辞書』の例を挙げる。

この他、「古記録DB」には、『建内記』の一例（これは「正と不正」の意）、『上井覚兼日記』の五例、「古文書DB」には、『吉川家文書』の一例^⑥と「長宗我部氏掟書」一例が見える。齋木一馬氏の挙例と辞書やDBの例を年代順に整理して示す。

1、猶々、今度之參會之分、事成候者、可^レ目出^レ候、拙者事中途まで打か、り候間、順逆參會可^レ申候、

（相良家文書 一ノ四八九〈弘治三（一五五七）年〉三月四日、伊集院忠朗書狀）

2、猶々、今度之事者、順逆罷渡、可^レ致^レ參會^レ候、愚老之事、追而之儀難^レ成候、

（相良家文書 一ノ四九〇〈弘治三（一五五七）年〉三月四日、伊集院忠朗書狀）

3、乍^レ勿論^レ順逆御意をハそむき申間敷事ニ候間、

（吉川家文書 天正十一（一五八三）年八月十三日、吉川元長起請文）

4、拙者返事、（中略）耽落着候論所之義候間、今更拙者前よりは順逆申間敷候、

（上井覚兼日記 天正十三（一五八五）年四月廿九日）

5、（前略）御光儀者可^レ被^レ指置^レ之由申候、御使順逆御祝言^ニ御礼被^レ成候する由候通頻承候、

（上井覚兼日記 天正十三（一五八五）年五月十八日）

6、順逆^レ鹿^レ（鹿兒島ノコト）へ被^レ參候はでは事終まじき由申候也、

（上井覚兼日記 天正十三（一五八五）年七月十二日）

7、順逆^レ立花之事ハ、羽柴殿へ申入、統虎名字之事も立花と名乗かへなと承候在所之事候条、下城申ましく候、

（上井覚兼日記 天正十四（一五八六）年八月廿四日）

8、談合之趣、委被聞召候、順逆^レ筑紫を先御退治可然被思召候へ共、

（上井覚兼日記 天正十四（一五八六）年九月一日）

9、作職之事ハ、近年如相改、順逆^レ地頭可任自由事、

（長宗我部氏掟書 文祿五（一五九六）年十一月十五日）

10、御前秀吉之儀、年來之御首尾と云、順逆^レ共に貴殿へ任入迄に候、

（加能古文書 〈年欠〉 閏正月廿日、伊達政宗書狀）

『パヂエス日仏辞典』の「九州方言」という記載や『日葡辞書』の「下」^{シモ}注記、それらを受けて『時代別室町』では、「九州方言」と記載するが、齋木一馬氏の挙げられた『加能古文書』（伊達政宗書狀）に例が見えるのが注目される。『阿蘇文書』の四例を見ると、例①が文明十三（一四八一）年、例②～④が永

正二（一五〇五）年であり、「順逆」は一五〇〇年前後から用例が見える。このように早くから九州に用例が見える語の場合、室町後期では九州方言と記述されながらも、東北の伊達家関係の文書に用例が見える場合がある。九州のほか東北の文書に用例が見える語である。この種のものとしては、今回「（一）、九州以外にも広がりがあるもの」に入れた「5格護」がある。「格護」については今後、用例を博搜して別稿を期したい。

三、九州方言の可能性がある記録語

ここでは先に「（三）、九州方言の可能性があるもの」とした「愀易、愀變、閉目」の三語について検討する。

三の1、愀易（しゅうえき）

「愀易」は『阿蘇文書』に一例見える。

①、（阿蘇家文書下）「本田親貞書状写」

如御札連々宗運入魂故、堺目和睦之儀、千秋万歳候、倍永々無愀易可被仰合事、至我々可爲本望候、（後略）

（天正十一（一五八三）年）八月廿二日

阿蘇殿 御報

（『阿蘇文書之二』737頁5行）
本田下野守 親貞

この語は、『日葡辞書』や『日国大』（第二版）、『時代別室町』には記載がない。「古文書DB」にも用例は無い。「古記録DB」

には、「愀易」一例（『上井覺兼日記』）がある。

1、又八向後可申承事、愀易有ましき由共申候也、

（上井覺兼日記 天正十四（一五八六）年三月廿七日）

齋木一馬氏は「古記録DB」と同じ『上井覺兼日記』の例文を「愁易」（シウエキ）と表記し、「心がわり、変心、違反、違約」の意味を示す。

「愀易」は今のところ、『阿蘇文書』（天正十一（一五八三）年、書き手の本田親貞は島津家家老）と『上井覺兼日記』（天正十四（一五八六）年）に例を見るのみで薩摩関係の例に限定される。この語は九州方言であろう。

三の2、愀變（しゅうへん）

「愀變」も『阿蘇文書』に一例見える。

①、（阿蘇家文書下）「町田久倍書状写」

如御札連々宗運入魂故、堺目和睦之儀、千秋万歳候、倍向後無愀變可被仰合、至我々可爲恐悦候、（後略）

（天正十一（一五八三）年）八月廿六日

阿蘇殿 參 御報

（『阿蘇文書之二』737頁10行）
町田出羽守 久信

「愀變」は『日葡辞書』には見えない。『日国大』（第二版）には「しゅうへんシウ：【愀變】〔名〕心や態度を変えること。心がわり。変節。*上井覺兼日記：天正十一年（1583）一〇月二日「聊別条にて爰元より愀變之儀無之候」*上井覺兼日記

「天正十一年(1583) 一〇月一六日「前刻城殿より聞せられ候趣に無_レ愀_レ變_二候、一段懇之儀共也」_一とある。

『時代別室町』には、「しうへん〔愀_レ變〕 変節して心変わりすること。」「去冬当家と龍和陸之儀懇望候。然者御媒介に任候由申候処、旁御謀略にて愀_レ變_レ被_レ成候。曲事千万存候刻」(上井日記 天正十二年、五、廿四)「彌_レ於_二向後_一無_レ愀_レ變_二可_レ啓承_一候」(水江事略 永祿十二、十一、十三、大友親貞書狀)とある。「古記録DB」には、『上井覚兼日記』のみの九例を挙げる。「古文書DB」では、『吉川家文書』の「島津義久書狀」に一例見える。その例を示す。

1、肥州表之儀、秋月種實以媒介、去歲已來屬和融候、然者、到龍造寺別而被仰合候歟、倍不可有愀_レ變_二候、(後略)

(吉川家文書七三〈天正十三(一五八五) 年四月廿六日、島津義久書狀)

齋木一馬氏は、「愁_レ變」の表記で『上井覚兼日記』の五例、『続大友史料』(新納忠元誓狀)の一例を挙げる。

書狀の書き手は町田久倍(久信)、島津義久、新納忠元など島津家の人々が大半だが、『時代別室町』が挙げる「水江事略」(永祿十二(一五六九) 年十二月十三日の大友親貞書狀が有ることから九州地域で使用があつたもので九州方言であろう。用例は永祿十二(一五六九) 年から見え、特に天正十一(一五四) 年(一五八三) 八六 年の例が多い。「愀_レ變」も九州の方言である可能性が高い。

三の3、閉目(とじめ)

「閉目(とじめ)」は『阿蘇文書』には四例見える。

①、(阿蘇家文書下)「恵良惟澄置文写」

さためをくこれすみか遺跡等事

(中略)、又これむらかとかはなに事そや、これによてあとの事を申をかに、いささかこころにたかふ事ありとも、閉目をまつへきところに、いくほともあるましき存命のうち二、向背におよふあひた、是非の沙汰におよはす、(後略) 正平十九(一三六四) 年歳次甲辰七月十日

阿蘇三社大宮司惟澄 (『阿蘇文書之二』280頁1行)

②、(阿蘇家文書下)「大友義長書狀写」

(前略)、乍去先以無事之閉目、其方可爲御同前候、巨細定對御使僧之、年寄共可申候、恐々謹言、

(永正五(一五〇八) 年) 十一月二日 義長

阿蘇殿

(『阿蘇文書之二』212頁12行)

③、(満願寺文書)「一一 大友義鎮書狀」

(前略)、肥後國可任所存事、不可移時日候、於彼國中一寺可預進之候、在所柄被相閉目、重而承、以一行可申候、恐々謹言、

(天文十九(一五五〇) 年) 閏五月十六日 義鎮

満願寺殿 (『阿蘇文書之三』阿蘇文書附録13頁11行)

④、(阿蘇家文書下)「廉宗書狀写」

先日者預御懇札候、則御報可申候處、泉福寺身上之儀承、

閉目候て爲可申入、于今延引候、聊非疏略之儀候、(後略)
(年欠) 九月七日 廉宗

矢津田監物允殿 參 御報 (『阿蘇文書之二』650頁11行)
『日葡辞書』には657頁右に、「Togimeuneta. トヂメ、ムル、メタ(閉ぢめ、むる、めた) 物事の結末をつける、または吟味し決定する。『Cotobauo togimuru(言葉を閉ぢむる)人の言った言葉を詮索する、すなわち、なぜそのような言葉を言ったのかを詮索する。』Ityogimeve vogu.(言ひ閉ぢめておく)ある物事を調べ終えて、十分に言い固めておく。」とある。

『日国大』(第二版)には、「とじめ^{とぢめ}」【閉】(名)①物事のしまゝ。終結。*源氏(1001-14頃)*金葉(1124-27)*頼政集(1178-80頃)②死にぎわ。最期。末期。*源氏(1001-14頃)*夜の寢覚(1045-68頃)③処分すること。処置を決めること。*編年大友史料-永祿九年(1566)二月二日・大友氏老中連署状④役目を果たすこと。番役などを勤仕すること。*上井覺兼日記-天正二年(1574)八月一七日」とし、掲載辞書として「日葡・言海」を挙げる。

『時代別室町』には、③に「③そのことをひたすらつとめ、追求して、全うすること。また、その結果の処置など。」とし、「上井日記 天正十三、十一、十八」、「大友宗麟覚 天正十二、四、三」、「高良山座主坊文書 永祿十二、二、廿二」の用例を示す。

『角川古語大辞典』には、「とぢめ」の⑦に「処分。また、決着。〔相良家文書・天文一四・九・一三・酒井寺快宥書状〕」、⑧

に「役目を果すこと。番役などを勤仕すること。〔上井覺兼日記・天正一二・五・三〕」を挙げる。

齋木一馬氏は「閉目」の意味として「処分、結着、勤仕」をあげ、「上井覺兼日記」の五例、『相良家文書』二例、『大友史料』二例、『毛利家文書』一例と『パヂエス日仏辞典』の記述(結着をつける、または確認する)を示された。

『阿蘇文書』の例は、次のような意味となろう。

①正平十九年〔一三六四〕七月十日の例は「決定(処分)の意」

②永正五年〔一五〇八〕十一月二日の例は「決着(結末)の意」

③天文十九年〔一五五〇〕閏五月十六日の例は「決定(処分)」の意

④(年欠)九月七日の例は「吟味(確認)」の意

この他、齋木一馬氏が挙げられた用例や辞書類と古文書DB(別の意味の例は省略)に見える用例を年代順に並べて示す次のようになる。

1、貴國御閉目之儀、重々兩人出國可仕之由、被 仰付候間、近々下國之覺語候、

(相良家文書〈天文十四〔一五四五〕年〉九月十三日、酒井寺快宥書状) — 「処分」

2、重而御とちめの御尋之段、しかと致_二承知候_一、
(毛利家文書〈年未詳〉毛利隆元〔1563-63〕書状、

元就宛）——「決着・処分」

3、豊前國御闕所閉目之義、^{キビシク}稠被^{キビシク}仰付^{キビシク}候之處、

（大友史料〈永祿九（一五六六）年〉二月廿一日、

大友氏老中連署狀）——「処分」

4、一 闕所〔分〕之儀、聊不^レ謂用捨最^レ眞、無^レ曇所^二、稠可^レ被^二相閉目^一之事、

（武家家法Ⅲ 宗麟大友義鎮分國下知條書寫、75頁）

——「処分、決着」

5、菟角其表社人社領閉目、無^レ緩可^レ被^二申付^一候、

（高良山座主坊文書 永祿十二（一五六九）年二月廿二日）

——「処分、決着」

6、就^二肥前國閉目之儀^一、到^二當山^一高良山宿陣之處、

（大友史料〈永祿十二（一五六九）年〉四月十八日、

大友宗麟書狀）——「処分、決着」

7、諸境爲御閉目、被成御進發、方々属案中候、

（相良家文書〈永祿十二（一五六九）年〉五月八日、

戸次鑑連書狀）——「処分、決着」

8、河上州御佗之事、（中略）、殊^二彼御家^一ニテ様之役之事、前代未聞之由御申候歟、是ハ十四五年彼役御閉目候間、爰^二

不始由御意候、

（上井寛兼日記 天正二（一五七四）年八月十七日）

——「勤仕、役目を果たすこと」

9・10、此前平佐地頭職被仰付、今迄^レ閉目申様に候、然者從

爰¹⁰閉目かたくおほされ候、類^二御佗^一にて候、

（上井寛兼日記 天正二（一五七四）年十月十七日）

——「勤仕、役目を果たすこと」

11、殊更日州之儀も爰元^二罷居候^一て申候てこそ、何事もとちまるへく候する歟と存候、

（上井寛兼日記 天正十二（一五八四）年二月五日）

——「勤仕、役目を果たすこと」

12、一郡、同諸郷庄、公事沙汰令^二出来^一、以^二閉目^一之上^二闕地等於在^レ之者^一、方分并役所へ被^二申付^一、裁判之人被^二任^一申旨、堅固可^レ被^二加^一下知事、

（大友宗麟寛 天正十二（一五八四）年四月三日）

——「処分、決着」

13、凡此衆を以、嶋原・三會之事ハ御番可^レ閉目之御盛也、

（上井寛兼日記 天正十二（一五八四）年五月三日）

——「勤仕、役目を果たすこと」

14、堅志田番之事、是非共御閉目肝要之通申候、

（上井寛兼日記 天正十三（一五八五）年十一月十八日）

——「勤仕、役目を果たすこと」

古文書DBでは、「閉目」は『台明寺文書』（宝治二（一二四八）年四月廿三日）に一例（「其身閉目之時」で「最期」の意）と『醍醐寺文書』（正平七（一三五六）年二月廿五日）に一例（「方今弟子杲寶閉目静心」で「目を閉じる」の意）があるが、意味が異なる。この他、例4に挙げた『武家家法Ⅲ（宗麟大友義

鎮分國下知條書寫」の一例と『島津家文書』の四例である。

『島津家文書』の例は、次のようなものである。

15・16・17

一 五斗出米之儀、被成未進候諸所ハ、不可然之由、可被仰出之由候、早々御閉目専一候、(後略)

一 殿中御番之事、御盛之月に巡來候する刻、堅可被相閉目候、(後略)

一 京衆被成歸京候之刻、六文出錢之儀、被仰渡候、未進之由請取衆被申候、(中略)、若々不相濟候ハ、近日¹⁷御閉目肝要候事、

(島津家文書一二二〇 平田宗酒外二名連署條書、

〈年欠〉三月廿日、『島津家文書』之三、81頁)

18、惣別築地改候て、上屋まで閉目被成候、其分御推量専一候、

(島津家文書一二二二 木脇如有祐充・伊地知重辰連署狀、
〈年欠〉霜月廿一日、『島津家文書』之三、82頁)

『島津家文書』の四例の意味は全て「勤仕、役目を果たすこと」の意味である。

古記録DBでは平安期の『小右記』の三例(「最期」の意)のほかは、『上井覚兼日記』に四一例見える。『上井覚兼日記』の例は、先に示した例8、9、10、11、13、14からもわかるように意味は「勤仕、役目を果たすこと」である。残りの例も大半が「勤仕」の意味である。『上井覚兼日記』と『島津家文書』

以外の『相良家文書』、『大友史料』等の例は「処分、決着」の意味である。ここに一線を画すことが出来そうである。

「閉目(とじめ)」は、『日国大』(第二版)の「①物事のしまつ。終結。*源氏(1001-14頃) *金葉(1124-27) *頼政集(1178-80頃)」や「②死にぎわ。最期。末期。*源氏(1001-14頃) *夜の寢覺(1045-80頃)」の意味では平安時代に京都で使用されていた語である。それが室町後期になつて九州地方で『日国大』(第二版)の「③処分すること。処置を決めること。」で使用され、「④役目を果たすこと。番役などを勤仕すること。」の意では、天正年間以降の薩摩・大隅の『上井覚兼日記』や『島津家文書』で使用されていると言える。

「閉目(とじめ)」は、時代の変遷と地方への伝播の過程で意味を變化させた語と見ることが出来るのではないか。『阿蘇文書』の例は、『日国大』(第二版)「③処分すること。処置を決めること。」の意味で使用されていて、この意味としては例2の『毛利家文書』(毛利隆元[1523-63]書狀)がある事から、九州地方とその近隣の方言と考えられる。一方、『日国大』(第二版)「④役目を果たすこと。番役などを勤仕すること。」の意味に関しては、今のところ、『上井覚兼日記』と『島津家文書』にしか見えず、薩摩・大隅独特の方言の可能性がある⁷⁾。

四、おわりに

本稿では、先の拙稿で指摘した、『上井寛兼日記』と『阿蘇文書』に共通する語のうち、「(二)」、九州方言と辞書等に記載のあるもの(「案利」(の)「(一) 如く」(の)「順逆」の三語)と「(三)」、九州方言の可能性のあるもの(「愀易」(の)「愀變」(の)「閉目」の三語)の検討を行った。その結果、「案利」は九州地方とその近隣の方言であり、熟語「案利」に関しては、「戦で思うように勝利を収める」の意で、『時代別室町』が述べるように「九州方言」と見なしてよいと思われた。「(一) 如く」は「の方へ、に向って」の意で、「九州地方とその近隣の方言」であること、「順逆」は九州と東北(伊達家関係文書)に用例があることが判明した。いずれも九州方言と指摘を受けつつも分布状況に微妙な広がりや違いが見られた。

一方、「(三)」、九州方言の可能性のあるものと類推した三語は、辞書類には「九州方言」と言う記述はないが、検討の結果、「愀易」、「愀變」は九州方言の可能性が高まった。

「閉目」については、意味の違いで『日国大』(第二版)の「③」処分すること。処置を決めること。の意味では「九州地方とその近隣の方言」であり、同じく『日国大』(第二版)の「④」役目を果たすこと。番役などを勤仕すること。の意味では、天正年間以降の薩摩・大隅の『上井寛兼日記』や『島津家文書』で使用されていて、九州でも薩摩・大隅に特有ではないかと思

われる。

今回は、齋木一馬氏の挙例や辞書類の記述、古文書や古記録のDBの調査から検討を加えたが、古文書史料は未だ多くが未開拓である。今後とも更なる博搜と検証を期したい。また、(一)に分類した語の中にも特徴のある語がいくつかある。その吟味検討も今後の課題としたい。(了)

【注】

(1) 吉村豊雄・春田直紀編『阿蘇カルデラの地域社会と宗教』(二〇一三年三月、清文堂出版より刊行予定。尚、本来「記録語」とは古記録特有語の意であるが、本稿では広く古文書の語も含んだものとして扱っている。

(2) 齋木一馬「国語資料としての古記録の研究―近世初期記録語の例解―」『古記録の研究 上』(齋木一馬著作集1、吉川弘文館。一九八九年三月)。

(3) 注(2)の齋木論考によれば、「上井寛兼は島津義久の家老で、天正十四(一五四五)年生れ天正十七(一五八九)年に歿した。日記は天正二(一五七四)年より同十四(一五八六)年に及ぶが、中間にかなりの欠失がある。刊本三冊、大日本古記録(岩波書店)に所収」とある。なお、『別冊歴史読本 事典シリーズ 日本歴史「古記録」総覧 上巻』(新人物往来社、平成元年十一月)の「上井寛兼日記」の項目(三木靖記述)も参照した。

(4) 迫野虔徳著『文献方言史研究』(一九九八年二月、清文堂)、「第七章

方言研究史、第二節九州方言の語彙「日葡辞書の「下」注記」参照。

- (5) 原口裕「に」と「へ」の混用―近世初頭九州関係資料の場合―」(『福岡県
教授退官記念論文集

」、一九六九年)にも九州方言として「のごとく」の例が「上井覚兼日記」、「宗左衛門大夫覚書」等から示されている。

- (6) 古文書DBでは「吉川家文書」には、この他、年月未詳で「面影山下風位詰突之順逆乱切之順逆鐔貫大事鎌十文字(後略)」という例があるが、意味が違うので取らない。

- (7) 「上井覚兼日記」と「島津家文書」に関する記録語については神志那郁(熊本大学大学院教育学研究科二年)の修士論文「上井覚兼日記」における国語学的研究」において論じる予定である。なお、本稿の基盤は神志那郁と堀畑正臣の課題研究によるものである。

【参考文献】(本論に記載しなかったものを示す)

近藤国臣「長崎版日葡辞書にあらわれた方言資料」(『方言』112、212、

5、315、一九三一―一九三三年)

亀井孝「捷解新語小考」(『一橋論叢』39巻1号、一九五八年)

亀井孝「鐘楼蝙蝠録」(『一橋論叢』40巻1号、一九五八年)

柴田武「日葡辞書の九州方言」(『本邦辞書史論叢』三省堂、一九六七
年)

森田武「日葡辞書の方言語彙拾遺」(『方言研究年報』第十三巻、一九七〇
年)

今泉忠義「日葡辞書の研究」(桜楓社、一九七一年)

森田武「日葡辞書の方言」(『藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢』、一
九八一年)

【付記】 本稿は、平成24年度科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号25220472)「室町中期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の研究」の成果の一部である。

(ほりはた まさおみ／

大学院文学研究科第八回修了／熊本大学教育学部)